

政治教育者としてのの

ニコラウス・クザーヌス

加 茂 儀 一

一四〇一年モーゼル河畔のクエスに生れ、一四六四年タイバー河岸のトデイで死ぬまでのニコラウス・クザーヌスの生涯は、所謂クワトロツェントの前半に互り、一方では中世紀がまさに終末を告げんとしつつあり、他方ではルネッサンスと近世とが近づきつつある時代にあたつてゐる。

世界統一を夢想してゐた神聖羅馬皇帝が十一世紀の中葉過ぎに、グレゴリー七世（在位一〇七三—八五）のために彼の僧官任命権を奪はれて以來、法皇の権力が増大した。そして十三世紀の初め法皇インノセント三世（在位一一九八—一二一六）の時に、事實上宗教と政治の實権が法皇の手に握られるに至つて、中世紀のカソリックの統一文明が完成された。そしてトーマス主義的並びにストア主義的な實在論が勝利を得て、スコラ學をその最も完全な學的體系として有つ神學がその婢たる哲學に君臨して、此處に教權制度の確立を見るに至つた。

が然しこの支配も、十一世紀末以來屢々企てられた十字軍の遠征が十三世紀末にその失敗の終止符をうち、歐洲諸國民が教會に對する情熱を失ひ始め、法皇權の失墜が生ずると共に、次第に傾き始めた。そしてそれと同時に、前後

二百年に亘つた十字軍遠征のためにその財又は生命を失つた侯伯武士の階級が従來の彼等の地位を喪失するに至つたために、中世紀的封建制度は大打撃を受け、王權制度がこれに代つて成長を見るに至つた。たゞ獨逸に於てはこの封建制度はその後も比較的長く存續してゐたとは云へ、神聖羅馬皇帝は、フレデリック二世の歿（一二五〇）後、諸侯の勢力増大のために、チャールズ四世の時代（在位一三二二—一三二八）に選帝侯の選定を餘儀なくされた結果、神聖な内容をもつその帝權を大いに喪失するに至つた。

十四世紀はかゝる十三世紀に於ける單一な一大國家、普遍的な絶對主義に基く宗教權の崩壞の過程が更に進んだ時代である。それは羅馬法皇に於て最も屈辱的な運命を齎らした。法皇の勢力が衰へると共に、彼は次第に王權に左右される様になつた。そしてフランス王フィリップ四世が法皇と事を構へてこれに勝ち、自國人を擁立して法皇の位に即かせたが、この法皇クレメンヌ五世が南佛アヴィニオンに都を移し（一三〇九）て以來、法王は全くフランス王朝の勢力下に入り、此處に法皇のアヴィニオン幽閉時代が始まつた。そしてその後約七十年の間、歴代の法皇はフランス王によつて願使されるに至つた。が然しその期間の終りに羅馬にゐる人達の要求によつて、一三八七年に改めてイタリア人ウルベン六世が法王に選ばれ、羅馬に歸つて來たが、然しフランス出身のカーディナルと意見が合はず、後者はフランスに歸り、別に法皇クレメンヌ七世を立て、アヴィニオンに都せしめた。此時以來、羅馬とアヴィニオンとの二ヶ處に法皇があり、此處に所謂教會の分裂が始まつた。この時代約四十年間繼續し、そしてその間歐洲諸國は、各國の利益に従つて兩法皇の何れかに屬して相争ひ、一方法皇は彼の精神的獨立の喪失によつて道德的特權を失ひ、それと共に彼は財政的源泉の不足に惱まされ、そのために益々貪慾になり、法皇の權威は愈々衰微するに至つた。

この情勢に應じて教會に對する反對が各地に起り、英國ではウィックリフ（一三二五—一八四）は羅馬教會の教理に反對して、聖書の權威を主張し、フス（一三六九—一四一五）もまた教會の腐敗に對して攻撃の火の手を擧げんとしつつあつた。教會型に對する宗派型の對立は後のルテルへの發展の途を辿りかけてゐた。獨逸皇帝は法皇に對して獨立の機會を狙ひ、法皇と皇帝との間には争ひが絶えず、その間にあつて、邊境の屬地は常にその抗争に捲き込まれるに至つた。また王權の發達は、遅かれ早かれ國民的感情の勃興を促がし、一方北部ではハンブルグ、リューベック、ブレーメンを結ぶハンザ同盟、南部ではヴェニス、ジェノア、フロレンス等の自由都市が発生し、前者は共同組合の精神によつて貫かれ、後者は企業家の大規模な個人主義的資本主義の精神に満たされてゐた。スコラ學を支配してゐたトマス主義的實在論に對立して、既にオッカム（一二九九—一三四九）は個物を實在とし、普遍とは個物より抽象した共通名であるとする唯名論を唱へ、スコラ哲學を崩壊へと導いた。羅典語は既にその唯一の發言權を失ひ、ダンテにしろ、獨逸神祕主義者にしろ、彼等は自國語で書いた。更にこの時代の特徴として、北部では宗教的ヒューマニズムたる獨逸神祕主義が生れ、自立的な民族精神、人間の個人的生活の内部的な豊かさ、高潮せる感情や道德的意欲の充満せる靈の敘情詩的世界が漲り、共同體の精神によつて貫徹されてゐたが、一方南部に於て生れたイタリーの古典に基くヒューマニズムは、同様に個人的生活の内的な豊かさには満たされ、新プラトン主義的な美的精神によつて育てられてはゐたが、それは共同體の精神が缺けてゐた。斯くして、十四世紀には、中世紀的な束縛を脱して解放への途が開かれ、個々の力は中心的な力を越へて展開し、統一的な一者の代りに多が動き、現はれ、生は統一と普遍から自立と分離へ、集中から分化へ、絶對主義から個人主義へ、集合的客觀的精神から個人的・主觀的精神へ變つて行つた。そ

して經濟的の生活に於てもその指導は教會から俗人の手に益々移り行く傾向にあつた。

クザーヌスが生れた一四〇一年は斯かる情勢の中に明けた。前世紀に始まり、十六世紀に完成したルネッサンスは正にその中間のコースをとり始めたばかりである。教會の分裂状態は舊のままであり、その上に、法皇間の對立ばかりでなく、反教會的なる運動は、ボヘミアのフス派の運動に於て益々盛んであつた。この運動は單に宗教改革的なものであつたばかりでなく、その背後に諸侯の勢力があつて、一種の國民運動にもなつてゐた。十五世紀は、これら當面の問題を如何にして解決するか、といふことに迫られてゐた。教會の腐敗を慨嘆し、基督教の將來を憂ふ人達は、教會の分裂を解消することに努力し、例へばジェルソン（一三六三—一四二九）の如きは、法皇權の至上主義に反對し、基督教國の大會議によつてこれに權力を握らせ、といふ一種の立憲政治を樹立せんとした。この企ては勿論近代的な意味の立憲政治ではない。如何なる政府にしても被治者の任意の同意に基づかないものは絶對的ではない、といふこの會議運動の救済原理は、一部分ゲルマン流の組合精神に根ざし、一部分は、人民の意志は統治權の源泉である、といふ羅馬法典に於ける指示から得られ、他の一部分は中世紀の封建制度に於ける契約の要素を帯びてゐたのである。全體會議派の運動によつて一四〇九年にピザで教會の再統一のための會議が開かれた。が然し會議派の啓蒙分子はこの機會に教會の一般的改革を實現せんと欲してゐた。そしてグレゴリー十二世とベネディクト十三世の兩法皇は退位せしめられ、アレキサンダー五世が位についた。が然し改革案は延期された。その結果事態は決して解決されず、前記の兩法皇は辭職することなく、斯くして三人の法皇が鼎立することになつた。更にアレキサンダー五世の後のジョン十三世は、ナボリのラディスラスに追はれてフランスに逃避し、救ひを獨逸皇帝シギスモンド（一三六一—一四三

七)に求めた。後者は神聖羅馬皇帝として獨逸統一の野望を有ち、このためにも教會改革を喜ぶ一人であつた。そしてまた法皇に對して權力を有つ彼に、凡ての人達の改革の希望が繋がれてゐた。彼は新しく會議を開くことを條件にして法皇の乞を容れ、斯くして一四一四年にコンスタンツに於て會議が召集された。

この會議に於ては、教會の改革よりも主として異端の徒であるボヘミアのフス運動の鎮壓が中心問題となり、その結果一四一五年にフスは火刑に處せられたが、更に一四一七年には三法皇は免職され、新にマルティン五世が法皇に選ばれて、此處に始めて教會の統一が成つた。が然しフスの死後彼の後繼者達は團結して法皇に對抗したため、一四二〇年と一四二八年に皇帝シギスモンドやカーディナルのチェザリニによつてボヘミア人に對して新らしい十字軍が起されたが、これは失敗に終つた。

定期的開催を目的とした大會議は、新法皇ユーゲニウスによつて一四三一年にバーゼルに開催されることになつた。ニコラウスの公的生活はこの時から始まる。

この時に至る迄の間に彼は、既に子供の時、トーマス・アケンピスやエラスムスが教育を受け、エックハルトの獨逸的神祕主義の傳統が強く残つてゐたデヴェンタの教團に送られ、更に一四一六年にはハイデルベルグ大學に入學し、其處で唯名論の影響を受け、更に會議派の立場にも理解を有つ様になつた。一四一八年にはパデューア大學に於て彼は、近代的人文主義精神によつて育てられ、此處では數學者にして天文學者であつたプロスドキモ・デッベルドマンディヤ希臘學者であつたウゴ・ベンツイ更に決定的には宗教法學者ジュリアン・チェザリニ並びに當時の最大の科學者であり數學者であつたパオロ・トスカネリから得る處が多かつた。彼が數學者としても有名であり、彼の哲學的論證が

數學の類推に基いてゐたことは、この影響と引き離すことは出来ない。彼は、イタリーに滞在中に古典語を研究し、ヒューマニスト達の中で最も早く希臘語を理解してゐた人達の一人であつたと云はれる。一四二四年、僅か二十三才で彼は法學士の稱號を得、一四二五年に、南方のヒューマニスト的な、科學的な教養を得て、最初の移入者としてこれを故國に齎らした。同年に彼はトレヴィの聖シメオン教會の宗法掛の職を奉じた。そして教會的外交に手腕を示したために獨逸に於ける法皇使者カーディナル・ジョ・オルダノ・オルシニに見出されてその祕書となり、一四二八年に僧職に就き、そしてオルシニに従つてバーゼル會議に出席するに至つた。

彼は、彼自身の眼で既に一世紀以上に及ぶ教會の分裂を目撃し、教會内部の腐敗を實際に知つてゐたが故に、最初から會議派の立場を取つてゐた。殊に彼の郷土たる獨逸がシギスモンド初め他の二、三の諸王によつて分割され、これらの諸王の争奪によつてそしてまたその間に法皇の勢力に對する鬭争が介在することによつて、常に不安定な状態にあることを見てゐた。彼がかかる政治的宗教的分裂を體驗してゐたればこそ、彼は調和、一致を願ひ、そのためにまたシギスモンドにその政治的解決の主人公を期待してゐたことは吾々に容易に理解出来る。それは全くギールケが云ふ如く、ダンテが法皇黨との争ひのためにイタリーに安穩の時なきを憂ひ、平和、調和を求めてゐたことと傾向を同じくし、同時にそれは十四世紀、十五世紀を通じての心ある人達の共通の理想でもあつた。勿論彼が會議派の一人として、會議の議決を法皇に對して權威あらしめようとする立場は、彼の悟性から出た結論ではなかつた。それは寧ろ彼の強い内的敬虔から發露したものであり、基督教そのものに對する熱情の現はれであつたに他ならない。當時の會議派の多くの人達の心を支配してゐたものもこの敬虔な態度であつて、吾々はこのジェルソンに於てもこれを見る

ことが出来る。十五世紀のルネッサンスの特徴を個性の解放、中世紀的スコラ學並びに教會に對する全くの反抗中のみ見ることは、却つてこの時代を理解しないものであらう。十四世紀に發展して個別化的精神を帯びた唯名論も成程十五世紀に於ても存續してゐたが、然しそれはジュルソンに於ける様に、独自の發展をなすことなく、寧ろ統一と媒介を求め、神祕主義とスコラ學との一致を説いたのである。中世紀精神の眞髓であるトーマス・ア・ケンピスの

「基督のまねび」をも想起するがよい。十四世紀に本質的に敗退したトーマス主義もまたこの世紀には力強く出現してゐる。それらがたとひ北方的要素の中に多く見出されるにしろ、十五世紀がある意味で高度スコラ學の復古であるといふことが出来る。たとひ南方的ヒューマニスト、例へばローレーツォ・ヴァラの如きが、僧侶階級や法皇に對して極度の罵聲を放ち、教會の權威に對して疑ひをさしはさんだにしろ、彼等の多くは教會に對して恭順な態度をとつたのであつて、古代を典據とし、プラトんに聖火を點じてゐたヒューマニスト達もこの例に漏れなかつたのである。自由と拘束、新らしきものと古きものとの混合の上にこの世紀は立つてゐた。

絶對主義はフランス並びに英國に於ける王權の確立によつて次第に凱歌をあげつつあり、統一國家とそれに附隨せる凡ゆる體制が発生しかけてゐた。中央集權化、集中と組織に對する要求、それに伴ふ調和の強調がこの世紀の特色となつた。イタリーのヒューマニスト、殊に新プラトン主義者達が如何に天界の調和とそれによつて奏でられる妙音に耽醉したことか。

吾々は十五世紀の根柢に横はつてゐたこれらの潮流を理解することによつて初めて宗教會議の意義を知り、希臘教會と羅馬教會との合一の實現を理解することが出来ると同時に、その運動の中心にあつて、自らその運動に身を以つ

てあたつた人としてニコラウス・クザリヌスを本質的に明らかにすることが出来るのである。

一四三一年に開かれたバーゼルの大會議もまた皇帝權と法皇權との内部的狀態を整理する目的を有つてゐた。そしてクザリヌスはこの會議に當つては會議派の闘士として出席し、反法皇的態度をとつてゐた。そして彼はこの時に改革案として起草した「カソリック的統一」(De Concordantia Catholica, 1433)に於て、全體會議の權限、法王の權限並びに帝國、即ち、皇帝の職權に就いて述べてゐる。ここに於ても彼は決して悟性的に考へる合理主義者ではなかつた。彼の究極の目的は凡てのものの調和にあつた。相反する利害關係を如何に協調させるかが常に彼の問題であつた。彼はそのために現在の運動だけを見ないで、それを教會の歴史的な過去に結びつけることを忘れなかつた。が然しそれと同時に、教會權の性質と起原の批判を通じて會議の利益を前進させることを怠つてゐない。

教會は信者達の講社であり、基督との仲間に於ける靈の生ける和合である。そこでその結合のための秩序が必要であるが、これは教權制度によつて供給される。即ち、教會は唯一人の主に結びつけられ、彼から、精神的調和が正しい秩序と比例とに於てその凡ての民そして結合してゐる各員の中に、神がこの凡てのものの内にあることが出来るために、流れ入る。それは有機的構成を有ち、精神、靈並びに體を有つてゐる。その對であるものは、天上では三位一體、天使達並びに天上の列聖であり、地上では聖餐式、僧侶階級並びに信徒である。天上の分界に於けると同様に、地上の分界の各々に於ても教權制度と完全な段階があり、聖餐式に於ては聖餐の最も低い禮拜式から最も高い禮拜式まであり、僧侶階級に於ては副補祭から法皇まであり、信徒に於ては伯並びに太守から侯公及び王を通じて皇帝まであり、三者より成つてゐる至る處では、調和のある均齊は完全なものである。

そして各監督區では、司教が教會の統一を確保し且それを代表する。全體教會に於ては、全體の統一は法皇によつて確保され且代表される。が然し法皇の地位は漸次に發展したものであつて、彼は彼の首位をカルシドンの會議の決定の力によつて得てゐる。初期の五つの教長管區の中で羅馬の教長管區が時の經つ内にその年月、威嚴、その多くの殉教並びに神の特權によつて先頭に立つに至つた。が然し教會といふ場合には法皇又は法皇とカーディナルばかりでなく、羅馬又はコンスタンチノープルの下に結合され又はそれに從屬してゐる凡ての教會が意味される。これらの諸教會の合同が會議と呼ばれる。如何なる集會も法皇又は彼の使節を含まないものは大會議とは云へない。法皇は會議を召集し且それを主宰する權限を有つてゐる。が然し法皇が正當に集まつた大會議から分離する場合には、會議は教會のためにその仕事を繼續することが出来る。但し信仰に關する決定は法皇の参加がなくては出来ない。大會議には二種あつて、その一つは、法皇が教長として坐席につくものであつて、それは、常に法皇に從屬し、法皇が信仰の事柄に關して誤ることがなければ、法皇に對して判決を下すことが出来ない。その他の一つは、教會の全體の代表者達の大會議があり、これは疑ひもなく法皇の上に位してゐる。基督の代理として法皇は全體の教會を主宰するが然し、彼の權威は神的起原を有つと同様に、人間的起原を有つてゐて、彼の優位は單に彼の行政權にある。處で大會議の聲は全體教會の一致せる聲であつて、この一致は大會議の中に聖靈がおはしますことの確かな證據であり、大會議は、即ち、その權威を直接に神から得てゐる。それ故に大會議の權威は法皇のうちにあるのではなく、却つて凡てのもの同意のうちであり、法皇の權威は全體の教會の同意と承諾から得られてゐる。従つて全體會議は法皇自身に對して優越してゐる。法皇は全體會議の法規を變更し又はそれに抗することが出来ない。そしてまた大會議による改革令を

受諾する義務があり、それを抑壓し又は變更することは出来ない。

教會に於ける無秩序は、教父達によつて吾々に傳へられた秩序からの逸脱やその義務の不實行から生ずるのであつて、必要とされるものは、多くの新法規ではなくて、現存の宗教法に對する服従である。そしてまた法皇廳に於ける貪慾の非難を避けるために、凡ての禮金を廢止し、その代りに、教會の行政の費用を償ふために毎年集金しなければならぬ。假寺録や年金を廢止し、小さい特典の數を合併することによつて減じ、兼職を減じなければならぬ。

クザールヌスは斯様に、バーゼル會議にあたつて改革の提案をなしたが、内的敬虔を重んじた彼は、節度を有ち、傲慢の疑ひを避けることに努め、信仰と全體としてのカソリック教のために平和裡に行動することを念願としてゐた。そしてまた彼は單に法皇權に就いてのみならず、皇帝權に就いても改革の意見を述べてゐる。勿論彼の思想は根本に於て近代的なものではない。十五世紀に於て既に起りつつあつた國家思想、即ち、國家を國民の上に置き、前者を後者から分離せしめ、後者を單に支配の對象たらしめる思想は彼の思想の内容とはならなかつた。當時の獨逸の如く、封建的勢力が強く、皇帝と王とが絶えず屬地を回つて争ひ續け、神聖羅馬帝國の理想が未だ強く残つてゐた國に於ては、帝國思想のみが、この紛争を解決する様に思はれた。この中世紀的思想によれば、皇帝と帝國とは一致し、帝國は思想上の統一を信奉してゐる凡てのものを包含しそしてこの統一を生み出したのは基督教的信仰であり、基督教的信仰の許に結合してゐる凡てのもののためには帝國が充しくれる。従つて法皇廳と帝國の兩者は、神から直接與へられた制度として相互に引き離すことが出来ないものであり、有機的に結びつけられてゐる。それ故に教會の改革は帝國の改革と分離されるべきではなく、その逆も同様である。クザールヌスはこの見地から兩者を一緒に取扱つてゐる。

帝國も、教會の場合と同様に調和が保たれるためには、教權制度式に段階的でなければならぬ。即ち、皇帝は他の王達に對して優越してゐる、が然し彼は精神的權力から獨立しそして法皇の選舉に干渉してはならない。俗界が精神界に侵入する様なこと又はその逆の場合があつてはならない。が然し皇帝は教會と關係がないことはないものであつて、彼は正教の擁護者でもある。そして王が領土内に於ける幣害を改革するために國民會議を召集すると同様に、皇帝は、法皇が怠つた場合には全體教會のために機能を果さなければならぬ。斯様にして召集された會合に於ては、彼はそれを主宰し、且その法令に反抗するものを服従せしめるために盡力する義務がある。この場合にクザースがシギスモンドやフス派の人達を心の中に思つてゐたことは確かである。

が然し當時の獨逸の國內事情はこの理想の實現を許さなかつた。選帝侯達は各自の利益のために行動し、帝國のための奉仕を考へない。そしてかゝる自我觀のために戰爭と分裂が生じ、無秩序が支配して、中世紀に於て統一されてゐた皇帝と帝國とは對立の状態になつてゐる。皇帝は名のみであつて彼には實録が伴つてゐない。この危機を救ふためには、より強固な中央集權が樹立されなければならない。それには、傭兵の代りに常備軍の設置、軍隊や官吏を養ふための租税や關稅よりの收入の確保、司令權、財政權及び裁判權の強化、皇帝選舉法の改正が必要である。更に帝國の改革の妨げとなる諸侯に對して對抗するために毎年フランクフルトに國會を開催し、それには選帝侯以外に諸侯の代表者、殊に都市並びに皇帝の助言者である裁判官が出席しなければならぬ、そして帝國を十二の地域に分割し、各々に裁判所を設ける様にするべきである。

「カソリック的統一」が有つ斯くの如き改革案が、たとひバーゼルの大會議に於て、法皇に對する會議の優越、法

皇の専制權の取締並びに教職の不道德の監視等の中に實現を見たにしても、それは單なる議決に過ぎなかつた。一四三九年にこの會議が法皇ユーゼニウスを廢止し、フェリックス五世を新たに位につかした後も、前者は依然として退職せず、帝國の改革もシギスモンドの勢力の弱いために成就しなかつた。そしてその間にクザーヌスの法皇に對する反對的な態度も變化した。この原因に就いては明かにされてゐない、が然し彼がこの會議に出席して法皇派の被任命者である地位を争つてゐる人物を擁護しようとする企てが成功しなかつたことが彼をしてこの會議に對して幻滅の悲哀を感じしめたことや、法皇派の著名なヒューマニストたるアンプロジオ・トラヴェルサリの約束に誘惑されたこと或は更に有力な原因としては、一四三四年とその翌年との間に會議が殆んど行政的經驗もないのに、教會の全機關を掌握し、且フランスの過激派の人達に指導されて、結果をも考へないので極端な手段に訴へる企てをしつゝあつたこと、更に當時東歐に興つたオスマン・トルコのために脅かされてゐた東羅馬帝國の希臘教會と羅馬教會との併合の必要が迫つてゐたことに對する彼の關心等が擧げられるであらう。

その後の彼は、「ユーゲニウス黨のヘルクレス」と呼ばれた様に、全く忠實な法皇派の一人として活躍した。このことは彼が變節者であるといふ非難の原因となるかもしれない。が然し彼の念願が平和と一致にあつたことを吾々が思ふ時、それはあたらないであらう。事實一四四八年にカーディナルに昇進した後には於ても、彼は著書、「カソリック的統一」の改革的な目的の實現に努力したのであつて、ただ彼はその後、大會議の如き全く民主主義的な要素の多い、過激な手段に訴へる傾きのある方法によらなかつただけのことである。そして彼はティロールの山中にある自己の管區であるブリックゼンに歸つて、己れの故國を改革せんとした。更にまた彼は英國を除いた歐洲の殆んど凡ての

地方をこの改革のために歩いた。そして一四五八年に故國を去つてイタリアに行き、其處で一四六一年に死ぬまでの間の彼は、最も秀れた實行力を有つ改革者の姿であつた。殊に獨逸に於ける僧院の腐敗に對する改革は最も著名であり、そのためにシギスモンドと衝突し、彼の軍務によつて圍まれ、捕はれ身となつたこともあつた。彼は徹頭徹尾教會の政治家であつた。その意味に於ては、ルネッサンスの他のヒューマニスト達とも異なつてゐた。彼は、彼等の如くに、實證的な吟味をなして不満足であることがわかつた場合に、理想をその王庭から引き降ろす積極的な政治的ルネッサンス人ではなかつた。

これらの事柄と關聯して、政治家としての彼の眞髓を知るためには、彼の態度が決定的に變つた一四三六年より前に書かれた「カソリック的統一」のみに頼ることは充分ではないであらう。彼の本質は、自然科学的業績にも勝つて彼の哲學の中にあり、それがまた彼の政治の原理ともなつてゐるのである。

「學識ある無知に就ス」(De docta ignorantia) (1440)・「假定に就ス」(De coniecturis) (1441-44)・「神の諦視に就ス」(De visione dei) (1453)・「學識ある無知の辯護」(Apologia doctae ignorantiae) (1449)・「精神に就ス」(De mente)・「球戯に就ス」(De ludo globi) (1463)・「存在可能に就ス」(De possibili) (1460)・「神の親子關係に就ス」(De filiatione dei) (1445)・「俗人との對話」(De idiota) (1450)・等の哲學書の中に、數學的な術語とパラドクシ的な論證で以つて説かれてゐる彼の所謂「反對の一致」(Coincidentia oppositorum)こそ彼の哲學體系の根幹であり、同時に彼の政治理論の基礎でもあらう。

彼の問題は神と世界との認識であつた。彼は常に神と世界との究極の一致を説いてゐる。彼(此處では大體「學識

ある無知」と「存在可能に就いて」から引用する）によれば、神は絶対的の最大者であり且また絶対的の最小者でもあつて、この二つは一致する。即ち、絶対的の最大者である神は現實的に存在し得る凡てのものである。それ故にそれに比べては何物もより大であることの出来ないもの、即ち最大者であると共に、それに比べては何物もより小であることの出来ないもの、即ち最小者である。即ち、絶対的の最大者は、その外に何物をも有しないが故に、凡ての反對を免かれ、従つてそれに於ては最大者と最小者とは歸一する。それは最大者と最小者との、又は一般に凡ての反對者の統一である。あらゆる有限的な事物は唯一の絶対的の最大者から來てゐる。而かもその最大者は、有限者の始め並びに終りとして必然的であり、何物もそれがなければ在り得ない。最大者は具體的な存在又は非存在の何れに於ても反對者を有つてゐない。それは絶対的の必然性として實存する。最大者並びに最小者として且凡ての反對の一致として斯様に考へられる神は、凡てのものの本質である。神は、一にして、永遠的な、無限的な、不變化的である純粹の存在である以上、諸々の事物は、それらが統一と永遠性、無限性と不變性とを所有する限りに於て神の内にある、が然しそれら倍數より成り且變化し得べきものであり、限られたものであり且暫且的なものである限りに於て、それらは非現實的であり且神の内にはない。だが然し現實の最も内的な原理として凡ての現象の世界を支へてゐるものは神である。それ故に統一は多の原理且時間の永遠性となる。神と世界とのこの關係は、無限線と有限線との間の關係によつて例證される。有限線は分割出来る、無限線は分割出来ない。が然し有限線は線でないものに分割出来ないから、有限線はその本質に關しては分割出来ないものである。それ故に無限線は有限線の根據である。それと同様に、最大者は凡てのものの根據であり、凡てのものの標準である。二呎と三呎との二つの線の相違は兩者が所有してゐる根據の内に

ではなくて、兩者が等しく完全な仕方で根據に關與してゐない、といふ事實の内に、横はつてゐる。曲線は、それが絶對的に最大の又は絶對的に最小の曲線である場合には直線であるが故に、曲線であることは直線への關與である。たゞ然し直線は單純に且直接的に無限線に關與してゐるが、曲線は間接的に直線を通じて無限線に關與してゐる。凡ての事物に就いてもさうであつて、その結果實體と偶然との間の相違が起る。兩者にとつての最も完全な標準は最大者であつて、これは實體でもなく、偶然でもないが偶然よりも實體に近いものであり、それ故に超實體と呼ばれる。實體は、偶然よりもより多く究極的存在に關與してゐる。なぜかといふと、偶然は實體からその得來られたそして依存的な存在を有つてゐる一方、實體はその存在を超實體的なものから得てゐる。超實體的なものが無限の直線によつて表はされるとすれば、より多く現實的である世界に於ける諸事物は、現實的には、制限された仕方で、無限の直線に似てゐる有限な直線に類似してゐる。が然しより少く現實的である世界に於ける諸事物は曲線に類似してゐるが、これはそれが有つてゐる凡ての存在を有限的な直線を通じて、無限的な直線への關與から得てゐる、が然しそれは曲る度合が増加するに連れて益々現實的でなくなるものである、即ち、無限的な現實の正しさから脱する。

絶對的の最大者、即ち神を吾々は不可解的のみ理解することが出来る。なぜかといふとそれは事物の性質を有してゐないし、吾々によつて理解される凡てのものを超越するからである。知識はある不確かなものがある假定された確かなものと比較することによつて起る。それは或る關係による比較である。それ故に無限者は無限者として凡ての關係を脱するが故に不可知的である。吾々は知らないといふこと以外に何も知らない。が然し認識の欲求は徒に吾々に存するのではないから、吾々は知らないといふことを知らうと欲する。若しこれを完全に成就するなら、吾々は「無

知の知」に到達する。そしてひとは自らの無知をよく知れば知る程益々多くの知識を得るであらう。

彼はこの絶對的最大の者を神、即ち基督と同一視してゐるが、然らばこの絶對者である無限的創造者と有限的な被創造者との關係はどうか。最大者は一つのみ存在してゐて、それは反對者を有たないが故に、最小者と一致する。凡ゆる完全は神の完全の内に含まれてゐる。凡ゆるものは、その完全に於ては、絶對的最大の者の中に含まれてゐる、それ故に無限的な統一は凡てのものの包含である。それ故にまた同一性は相違の包含であり、不類似の類似である。それ故に神は、凡ゆるものが神の内にあるといふ意味に於て凡ゆるものの包含である。神は、彼が凡ゆるもの内にある限り凡ゆるものの展開である。斯くして神は凡ゆる事物の存在の本質的なそして永遠的な根據としてこれらの事物の包含であり、事物は神の展開である。従つて世界は具體的の最大者として表はされることが出来る。具體的者はそれがあるところの凡てのものを絶對的の最大者から有ち、そしてそれを出来る限り模倣する。それ故に後者に屬するものは又前者にも、然し勿論制限された仕方であつてゐる。世界は絶對者の似姿である。神は存在する凡てのものへ自らを關與することを求める、そして彼は各々の事物の性質が許す限り世界、即ち宇宙に於ける凡ての事物の内にある。世界に於ては神の統一が反映されてゐるばかりでなく、神の三位一體的な性質もまた反映されてゐる。

このことからクザームスは、個別的な存在に對しても強調を置いてゐる。世界に於ては正確に似てゐる事物は二つとない。正確な同等は同一であつて、それは神の性質の内にも見出される。それ故に各々の存在してゐる事物は唯一の個性と唯一の現實性とを所有してゐる。そしてまた世界に於ける凡ゆる特殊な事物は小宇宙としての世界の反映である。第二の統一である宇宙は、第一の統一である神と同様に、事物の性質が許す限り、各々の事物の内にある。

42
そして世界に於ける凡ての事物は、事物の性質が許す限り、凡ての事物の内にある。個別的な事物は單にそれ自身に於ては存在することは出来ない。それは世界の一つの繼續的な部分としてのみ存在してゐる。そしてそれは全體を作るに役立つてゐる。それ故に各々の個別的な事物は宇宙の縮少であり、全體は各々の分割された部分の内に映されてゐる。

斯様に吾々がクザーヌスの哲學の中から、その斷片を拾ふ時に、此處に彼の政治思想と密接に結びつく多くのものを發見する。彼が不可知的な絶對者、即ち神を考へ、それを基督のうちに見、そして世界が上昇的又は下降的な段階の秩序で形成されてゐると看做す時、其處に彼が段階的な、教權制度的な政治的構造を主體とする神學的政治家であることが示される。が然し彼はまた全然中世紀的な政治家ではなかつた。彼は中世紀的な全體主義的な考へを近世的な個人主義的な思想と綜合しようと企てたのである。即ち、彼は、パーゼル會議に於ても、當時の人達の中の、例へば、後に法皇バイアス二世となつたエネア・シルヴィオが主張した様な皇帝の中央集權的絶對主義にも、民主主義論にも荷擔しなかつた。それは個體を無視する傾向があつたからである。個別的な存在に強調を置く彼は、かゝる絶對主義に賛することは出来なかつたのである。が然し彼は近代的な個人主義者ではなかつた。近世に始まつた個人主義は、フランス革命によつて絶對主義を崩壊せしめ、それに代つて民主主義を出現せしめた。そしてそのために代議制度がとられるに至つた。が然しこの代議制度は最近に於てその失敗であつたことを露呈してゐる。クザーヌスは、パーゼル會議の改革案の内代議制度を主張したが、然しそれは近世が有つたものとは異なつてゐた。彼は個體を羅馬的ヒューマニストの如くに孤立せしめなかつた。獨逸的神祕主義者としての彼は、理性の唯一支配によつて己れを賴り

としてゐる解放された個體が孤立化することを恐れてゐた。彼は後者の立場によつて個體を孤立化から救つたのである。前述した様に、全體性としての絶對者の中に個々に於ける諸對立の克服が成就される。そして絶對者はそれ自身の内に凡ての個々の對立を包含してゐる。が然しそれは多數の對立の内部へ、各個に於て異なつて且獨自に、展開されねばならない。従つて各個體は初めてその獨自の存在を得る。處で個體の内には絶對者が展開されてゐるから、即ち後者は可能として前者の内にあるから、それは全體との聯關を失はない。普遍者、絶對者とのこの聯關、即ちそれへの關與は、結局は多くの個々の事物並びに個々の人間がより高い統一へ内的に等しく向ふことを保證するものである。即ち統一への意志によつて、等しい精神的態度によつて、凡ての個人が結合されてゐる。云ひ換へれば、全體に於ける個の地位が高まれば高まる程、この關與によつて個の責任が強くなるのである。従つてクザイヌスが意味するこのプラトンの代表は、決して地域的な代表ではない。又それは個人主義に基づいた代議制度ではなくて、全體的統一への意志を有つた人間の代表であり、全體を反映してゐる人間の集まりである。

個體に強調を置く彼にとつてはまた中央集權化の主張も決してそれは個體の一樣化を意味してゐなかつた。個體の中には絶對者が反映され、その内にあるのではあるが、然しその展開の仕方は各個體によつて相違し、獨自的なものであつて、かかる相違した、獨自的の仕方では個體は絶對者、普遍者に關與してゐるのである。従つて世界に於ては對立は必然的である。が然し全體者の秩序は相違してゐる個々の結合を要求してゐる。ライブニッツは最も小さい統一者（モノイド）を無秩序から守るためにそれを豫定調和に服従せしめた。が然し彼の方法は機械論的であり且絶對主義下に於ける様に、個體の獨立性を破壊してゐる。クザイヌスでは然し個體の獨自性が守られたのである。

44

兎も角クザーヌスの改革案は、當時に於て發生しかけてゐた個人主義的傾向が全的に生長したために、遂に實現されないうままに残つた。一方では中世紀的世界觀の中にあり、他方では近代的な世界觀を見出してゐた彼は、丁度中世紀末と近世との境目にあつたが故に、前者に活を入れるには遅く、後者にとつて知られるには早や過ぎたのである。が然し近世が創始し、且その創始されたものによつて支へられて來た現代の個人主義的文化が危殆に瀕してゐる時、クザーヌスの解決法は何等かの暗示を與へるものであらう。

(本稿を丁度書かうとした時に、筆者の勤めてゐた學校は、例の雷禍のための類焼によつて何一つ残すことなく燒失した。燒跡整理に忙殺されてゐたためによく纏らなかつたことは残念である。)